

第1章 地理的・歴史的環境と既往の調査

第1節 庄・蔵本遺跡について

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスは、徳島市庄町1丁目および蔵本町2丁目・3丁目にまたがり所在する。2006年に刊行された徳島県遺跡地図（徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター編2006）によると、蔵本キャンパスは蔵本遺跡の大部分および庄遺跡の東端を含む範囲を占める（第1図－5・6）。1998年の時点で、蔵本キャンパスの範囲は庄遺跡の一部とみなされていたが、地籍上は大半が蔵本町に属し、庄町には西側の一部だけがかかることから、本調査室では暫定的に庄・蔵本遺跡と呼称した（北條編1998、第1図－1）。それ以降、本調査室では、この名称を使用し続けており、もはや正式名称として定着した感がある。そこで、本報告でも遺跡地図での名称とは別に、本学構内の範囲を独自に庄・蔵本遺跡と呼ぶこととする。

第2節 地理的環境

庄・蔵本遺跡は吉野川の支流である鮎喰川の下流域右岸、四国山地東端の眉山北麓に位置する。現在の鮎喰川は、四国山地の雲早山に源を発し、外帯を約50km北流して吉野川と合流する。下流域では、数面の沖積段丘面を伴う扇状地性平野が発達することが知られている。また、上流域で御荷鉾構造線をはじめとする複数の破碎帯を通過していることに加え、地すべりや山腹崩壊により、下流域の平野部において、礫層が厚く発達し、礫床河道となっている（古田2005）。

吉野川下流域から河口付近の古環境をみると、約2万～1万8千年前には、海面の高さは現在に比べ約100m前後低かったのに対し、その後の温暖化にともない海面が次第に上昇したとされる。約6千年前の縄文海進のピークには、吉野川河口部の汀線は現在の地形面に比べ標高5m程度内陸に入り込んでいたと推定される。鮎喰川は直接、紀伊水道に注ぎ込み、河口部に三角州性扇状地を形成したとみられている。その後、やや寒冷化する弥生時代以降、海面の低下と吉野川から流出した土砂の堆積により、三角州が発達していく（古田1996・2005、平井1998）。

第3節 歴史的環境

本学蔵本キャンパスは、全域が埋蔵文化財包蔵地の指定を受けており、縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡の上に位置する。以下、周辺の遺跡について時代ごとに概観する。

旧石器時代 現在のところ、庄・蔵本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡は確認されていない。徳島県内においては、吉野川中流から下流域の北岸に同時代の遺跡が分布する（氏家2002）。

縄文時代 徳島県内において、縄文時代草創期から前期の遺跡は存在するものの遺跡数は限られ、そ

の様相は不明瞭である。中期になると遺跡数が若干増加し、三好郡東みよし町の加茂谷川支流沿いに位置する加茂谷川1号岩陰や、吉野川中流域の美馬郡つるぎ町貞光前田遺跡では、船元Ⅰ式・里木Ⅱ式の土器が確認される。鮎喰川下流域左岸の矢野遺跡（第1図－18）では、中期末から後期前葉の集落が検出されている（湯浅2002）。

一方、庄・蔵本遺跡周辺で遺跡形成が本格化するのは後期後葉以降であり（中村編2011）、庄遺跡（第1図－6）の財務省蔵本住宅地点で、後期後葉の住居址1棟が検出されている（岡山編1999）。また、庄遺跡各調査地点では、後期末から晩期前半の土器や石器が確認されている（湯浅2002、中村編2011）。晩期後半には、名東遺跡（第1図－11）で自然落ち込み遺構から刻目突帯文土器および石器が出土し（勝浦編1990）、三谷遺跡では刻目突帯文土器と遠賀川式土器の共伴が認められる（勝浦編1997）。

弥生時代 庄・蔵本遺跡では、弥生時代前期の居住域・墓域・生産域を含む集落の全容が把握されつつあり、これらが隣接する南蔵本遺跡（第1図－4）まで広がることが確認されている（近藤編2014など）。一方、前期中葉～前期末・中期初頭になると、洪水起源砂層によって遺跡の広範囲が埋没した状況が確認されている（中村編2011など）。なお、庄・蔵本遺跡や名東遺跡周辺の旧河道は、鮎喰川の旧分流の一部と考えられ、弥生時代初頭の居住域はこれらの旧分流の中州か眉山北麓斜面に立地していたと想定されている（古田2005）。

中期前葉から中葉には、庄・蔵本遺跡周辺において遺物自体は確認されるものの、居住域や墓域は不明瞭である。一方、中期後葉になると、鮎喰川流域では、右岸の名東遺跡や庄・蔵本遺跡一帯で数十基の方形周溝墓、左岸の矢野遺跡（第1図－18）で30棟前後の竪穴住居址が確認されるようになるが、水田などの生産域はわかっていない。次の後期初頭になると本地域では、再び遺構、遺物とも極端に減少する（近藤2012）。なお、名東遺跡（第1図－11）では中期後葉から後期初頭と考えられる扁平紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている（勝浦編1990）。

後期前半は、中期後半に比べ竪穴住居址の数は少なく墓域や生産域も不明瞭であるが、次の後期後半から終末期になると、竪穴住居址数は増加し、中期後半の数を上回るようになる。矢野遺跡（第1図－18）では蛇紋岩製勾玉の未成品が出土する遺構や鍛冶関連遺構、突線紐式銅鐸の埋納遺構が検出されている。矢野遺跡の南に隣接する延命遺跡（第1図－19）では墳丘墓をはじめとする墓域が認められ、石井城ノ内遺跡では水田が確認される（近藤2012）。

古墳時代 眉山西北麓の丘陵尾根上には前期古墳が点在する。節句山古墳群（第1図－12・13）では2号墳から浮彫式獣帯鏡が出土している。八人塚古墳（第1図－15）は本学が測量調査を実施し、全長約60mの前方後円墳で川原石を用いた積石塚であることがわかっている（東ほか2006）。庄・蔵本遺跡の南にあたる眉山北麓では、今のところ前期古墳は確認されていない。また、当地域における中期古墳は未発見である。前期から中期の集落については、庄・蔵本遺跡などで、溝や井戸、住居址が検出されているが、全容は不明瞭である。後期になると横穴式石室をもつ穴不動古墳（第1図－14）などがみられるが、やはり集落域はわかっていない（北條編1998、中村編2011）。

古代 観音寺遺跡と敷地遺跡（第1図－16・17）の発掘調査により、多数の木簡および多彩な遺構・遺物が確認され（藤川編2002など）、これらの遺跡一帯が国府であった可能性が高いとされている

(藤川 2015 など)。一方、庄・蔵本遺跡と名東遺跡周辺では、大型の掘立柱建物跡や墨書土器、石帯、木製祭祀具などが相対的に多くみられる点から、郡衙のうち名東郡であった可能性が指摘されているが、それを決定づける根拠は未発見である(藤川 2002、早瀬 2002)。また、この一帯では条里地割に伴う可能性がある溝が検出されている。

中世 12世紀後半から13世紀が中心時期とされる中島田遺跡(第1図-7)では、道路状遺構の両側に規則的な屋敷地区画が確認されるとともに、椀形土器において他遺跡で一般的な和泉型瓦器椀よりも吉備系土師器椀が集中して検出されている(石尾 2002b、島田 2008)。そこから当遺跡を物資の集散地と評価し、さらに「市庭」跡(福家 2002)や「市町」(石尾 2002b)と解釈する見解もある。名東遺跡や庄遺跡周辺では、溝を中心とした遺構や瓦器・土師器などは検出されているが、遺跡の性格は不明瞭である(福家 2002、島田 2008)。

近世 近世の庄・蔵本遺跡周辺は、城下町周辺の散村および水田であった可能性が高く、後述する鮎喰川の改修工事などにより水田開発が進められていったと考えられる。その一方で、当該期の水田開発により、古墳時代から中世の遺構の多くが削平された可能性が指摘される(中村編 2011)。また、佐古に所在する蜂須賀家万年山墓所(第1図-2)は、10代藩主蜂須賀重喜が藩政改革に伴って造成した儒式の墓地で、以後蜂須賀家は仏式の興源寺と儒式の万年山による両墓制となった(徳島県の歴史散歩編集委員会編 2009)。

鮎喰川の河川改修の記録は、1585(天正15)年の逢庵堤が知られ、徳島城の築城および名東郡の洪水対策のために、右岸の築堤が行われた。その後、享保年間(1716～1736年)や寛政年間(1783～1792年)の工事によって、右岸の連続築堤が完成した。しかし、逆にこれが天井川化を加速させ、今日にいたる洪水被害の一因となったという指摘もある(古田 2005)。ほかに、元禄年間(1688～1704年)には、鮎喰川流域右岸の水不足解消のため、袋井用水(第1図-9)の開削が開始された。また、蔵本付近は伊予街道と讃岐街道の分岐点に位置し、交通の要所でもあったとされる(ふるさと徳島編集委員会編 1991)。

近現代 蔵本キャンパスおよびその周辺には、1907(明治40)年、第10旅団司令部、歩兵第62連隊が設置されたが、第1次大戦後は廃止された。これにかわり1925(大正14)年、歩兵第43連隊が移駐し、1945(昭和20)年まで存続することとなる。また、1908(明治41)年に徳島衛戍病院が設けられ、その後、徳島陸軍病院と改称された。1945年7月4日の徳島大空襲の後、同月24日に1トン爆弾によって、歩兵第43連隊本部を標的とした蔵本空襲があったとされる(山川 1995)。

終戦以降、連隊跡地には、1947年に官制徳島医学専門学校および同附属病院が移転し、翌1948年に徳島医科大学および同附属病院となった。1949年には国立大学徳島大学および同附属病院が設置された。また、陸軍病院跡には徳島県立中央病院、練兵場跡に蔵本公園・賀茂名中学校、実弾射撃場跡に徳島県立林業試験場(林業総合技術センター)が置かれることとなった(ふるさと徳島編集委員会編 1991)。



第1図 庄・蔵本遺跡と周辺遺跡の位置（徳島県教育委員会文化財課・財団法人徳島県埋蔵文化財センター編 2006 をもとに作成）

第4節 既往の調査

庄・蔵本遺跡では、1982（昭和57）年の徳島県教育委員会による体育館器具庫新営に伴う第1次調査を嚆矢とし、2013年2月までに計29次、35,000 m²以上の発掘調査が実施されている（第1表）。本遺跡では縄文時代から近現代にいたる遺構・遺物が検出されており、なかでも弥生時代前期の初期農耕集落の調査成果は特筆される。

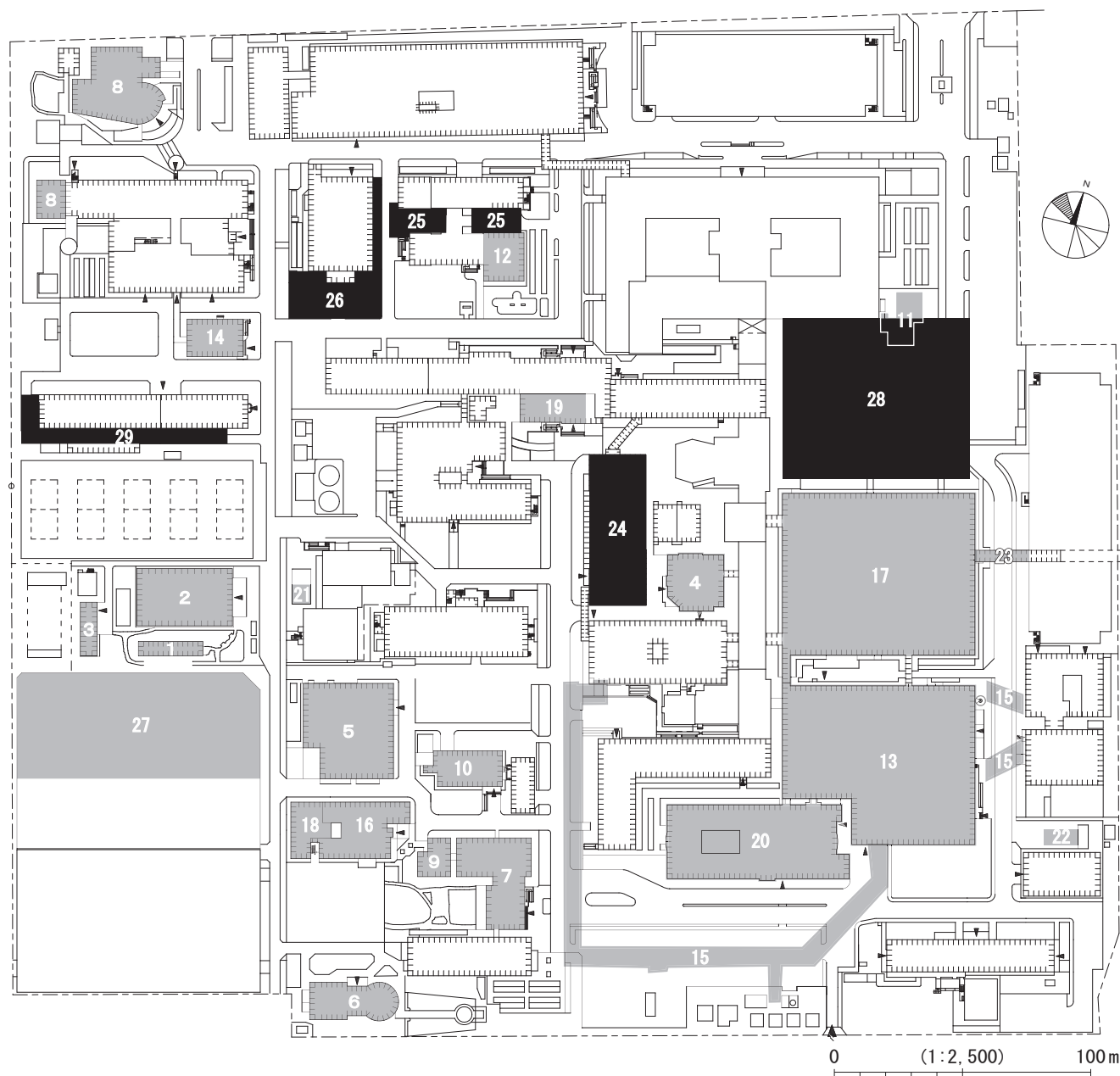
まず、当該期の墓域が本遺跡南半の西と東にわかれ分布することがわかっている（中村2002）。とくに西側では、計20基以上の石棺墓・配石墓・土墳墓・土器棺墓が列状に配された状況が明らかにされた（第6次調査、北條編1998）。生産域については、水田が複数地点で検出されており（第17・19・24・28次調査）、東に隣接する南蔵本遺跡までこれが広がることがわかっている（近藤編2014）。また、本遺跡南半を東流する旧河道（第5・13・15・16・27次調査）と、ここから分岐する用水路網（第5・9・10・13・15・16・26・27・29次調査など）や井堰（第5・13次調査）が検出され、水田への水の供給システムも判明しつつある。さらに、本遺跡では畝を伴う畠（第20次調査、中村2009b）が確認された点は特筆される。弥生時代前期の畠は全国的にも稀な事例である。第27次調査でも畠状の遺構が検出され（端野ほか2015）、出土した炭化種実の同定・年代測定や土壌の軟X線写真解析により、畠か否かについて慎重に検証を進めている。

居住域については、本遺跡で土坑群（第1～3・15次調査）が検出されているものの、明確な住居址は未検出である。ただし、南に隣接する南蔵本遺跡で、当該期の住居址が数基検出されており（徳島市教育委員会1989、中村1998・2002など）、遺跡の南側の眉山北麓に居住域の存在が想定されている。また、当該期の植物種実や木製品を良好な状態で検出した点は、考古学だけではなく植物学的にもきわめて重要な成果といえる（北條編1998、中村2009b・2010c、端野ほか2015など）。

一方、遅くとも前期末・中期初頭になると、洪水起源砂層によって本遺跡の大部分が覆われている状況が確認されている（中村編2011など）。弥生時代前期末・中期初頭から中世にかけては、地層の堆積状況により、各時代の遺構面を個別に検出するのは困難な状況である。そのため、当該期については遺跡の全体像を把握することは難しいが、時期別に注目される遺構・遺物を概観する。

弥生時代中期後葉前後の四隅が切れる方形周溝墓が確認されている（第2・13・16・20・27次調査、定森・中村編2005、中村2009b、端野ほか2015など）。また、鉄器生産に関して、弥生時代終末期の鍛冶関連遺構をはじめ、韃の羽口、鉄器、スラグ、石製の鉄槌や砥石が出土している（第16・18次調査、中村2003）。後期後葉から終末期に位置づけられる一〇（形）土坑を伴う住居址や、突線紐式銅鐸片（第27次調査、端野ほか2015）、異体字銘帯鏡片が出土している（第17次調査、中村2000）。

古墳時代前期については、布留式期前後の住居址や井戸（第2次調査、定森・中村編2005）、同中期は溝や井戸が確認されている（第9次調査、北條編1998）。古代には、掘立柱建物や墨書土器、木製祭祀具、石帯などが出土しており、本遺跡周辺を郡衙である名東郡に比定する説の根拠とされる。また、東西正方向にのびる古代の溝が検出されており、これらは条里地割に伴う可能性がある（第



- | | | |
|-----------------------|-------------------------------|----------------------------|
| 1. 体育館器具庫新営 | 12. 附属図書館蔵本分館増築 | 23. 連絡橋建設 |
| 2. 体育館新営 | 13. 東病棟新営（病棟Ⅰ期） | 24. 藤井節郎記念医科学センター新営 |
| 3. 課外活動共用施設新営 | 14. 医薬資源教育研究センター新営 | 25. 附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期 |
| 4. 医学部臨床講義棟新営 | 15. 共同溝設置 | 26. 大塚講堂改修 |
| 5. 動物実験施設新営 | 16. ゲノム機能研究センター新営 | 27. 立体駐車場新営 |
| 6. 青藍会館（同窓会館）新営 | 17. 中央診療棟新営 | 28. 外来診療棟新営 |
| 7. 医療技術短期大学校舎新営 | 18. ゲノム機能研究センター増築 | 29. 学生支援センター改修 |
| 8. 長井記念ホール・薬学部実験研究棟新営 | 19. 医学系総合実験研究棟Ⅱ期改修 | |
| 9. 医療技術短期大学校舎増築 | 20. 西病棟新営 | |
| 10. 酵素科学研究センター新営 | 21. 医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修（RI棟排水処理設備） | |
| 11. MRI・CT装置棟新営 | 22. 西病棟新営その他電気設備 | |
- 既往調査地点
 本書報告地点

第2図 庄・蔵本遺跡の既往調査地点と本書報告地点の位置

第1表 庄・蔵本遺跡既往調査一覧表

調査 次数	調査地点	年度	調査期間	調査主体	調査担当者 (○は調査主任)	面積 (㎡)	文献
1	体育館器具庫新営	1982	1982年11月30日～1983年2月5日(2か月)	徳島県教育委員会	島巡賢二, 秋山浩一 ほか	147	中村編2010
2	体育館新営	1983	1983年1月中旬～1983年11月30日(10か月)	徳島県教育委員会	福家清司, 久保脇美 朗ほか	1160	定森・中村編 2005, 中村編 2010
3	課外活動共用施設 新営	1984	1984年7月3日～1984年8月10日(1か月)	徳島県教育委員会	福家清司, 久保脇美 朗ほか	157	中村編2011
4	医学部臨床講義棟 新営	1985	1985年4月25日～1985年7月14日(3か月)	徳島県教育委員会	松永住美, 大谷泰久 ほか	655	中村編2010
5	動物実験施設新営	1985	1985年9月2日～1985年12月28日(4か月)	徳島県教育委員会	松永住美, 大谷泰久 ほか	1321	中村編2008
6	青藍会館(同窓会館)新営	1986	1986年12月11日～1987年3月20日(3か月)	徳島大学	岡内三眞, 河野雄次 ほか	540	北條編1998
7	医療技術短期大学 校舎新営	1987	1987年4月1日～1987年8月31日(4か月)	徳島県教育委員会	羽山久男, 久保脇美 朗ほか	870	中村編2011
8	長井記念ホール・ 薬学部実験研究棟 新営	1989	1990年1月11日～1990年2月28日(1か月)	徳島大学	岡内三眞, 桑原久男	1430	北條編1998
9	医療技術短期大学 校舎増築	1992	1992年7月11日～1992年9月4日(3か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	310	北條編1998
10	酵素科学研究セン ター新営	1993	1993年5月26日～1993年9月30日(4か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	623	北條編1998
11	MRI・CT装置棟新営	1994	1994年2月18日～1994年3月17日(1か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	224	HPに概要報告 書を掲載
12	附属図書館蔵本分 館増築	1994	1994年2月25日～1994年3月24日(1か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	288	HPに概要報告 書を掲載
13	東病棟新営(病棟 I期)	1994～ 1996	1995年3月27日～1996年3月31日(12か月), 1996年4月1日～1996年7月31日(4か月)	徳島大学	東潮, ○北條芳隆	5000	HPに概要報告 書を掲載
14	医薬資源教育研究 センター新営	1995	1995年6月21日～1995年9月5日(3か月)	徳島大学	東潮, ○橋本達也	300	HPに概要報告 書を掲載
15	共同溝設置	1996・ 1997	1996年11月1日～1997年3月31日(5か月), 1997年4月1日～1997年6月7日(2か月)	徳島大学	北條芳隆, 橋本達也, ○中村豊	1754	HPに概要報告 書を掲載
16	ゲノム機能研究セ ンター新営	1998	1998年9月1日～1999年2月2日(5か月)	徳島大学	北條芳隆, ○橋本達 也, 中村豊	1000	HPに概要報告 書を掲載
17	中央診療棟新営	1998	1999年8月1日～1999年3月(8か月)	徳島大学	北條芳隆, ○中村豊	5000	HPに概要報告 書を掲載
18	ゲノム機能研究セ ンター増築	2002	2002年3月11日～2002年6月10日(3か月)	徳島大学	北條芳隆, ○中村豊	311	HPに概要報告 書を掲載
19	医学系総合実験研 究棟Ⅱ期改修	2006	2006年4月17日～2006年7月25日(3か月)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊, 中原計	324	中村2009a
20	西病棟新営	2006	2006年6月27日～2007年3月15日(9か月)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊, 中原計	2645	中村2009b・ 2010c
21	医学系総合実験研 究棟Ⅲ期改修(RI 棟排水処理設備)	2007	2007年10月22日～2007年11月7日(2週間)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊, 中原計	45	中村2010a
22	西病棟新営その他 電気設備	2007	2008年1月9日～2007年2月14日(1か月)	徳島大学	定森秀夫, ○中村豊	103	中村2010b
23	連絡橋建設	2011	2011年4月4日～2011年4月18日(2週間)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎	100	HPに概要報告 書を掲載
24	藤井節郎記念医科 学センター新営	2011	2011年10月7日～2012年3月14日(5か月)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎	1800	本書
25	附属図書館蔵本分 館増築Ⅱ期	2011	2011年10月6日～2011年10月26日(2週間)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎	430	本書
26	大塚講堂改修	2012	2012年4月9日～2012年6月1日(2か月)	徳島大学	中村豊, ○遠部慎, 山口雄治	1030	本書
27	立体駐車場新営	2012・ 2013	2012年5月1日～2013年4月19日(11か月半)	徳島大学	中村豊, 遠部慎, ○山口雄治	3610	端野ほか2015
28	外来診療棟新営	2012	2012年7月2日～2013年1月19日(6か月半)	徳島大学	中村豊, ○遠部慎, 山口雄治	3688	本書
29	学生支援センター 改修	2012	2012年10月31日～2013年2月5日(3か月)	徳島大学	○中村豊, 遠部慎, 山口雄治	555	本書

2次調査、定森・中村編 2005)。近世は水田や溝、井戸、暗渠（第11次調査など）、木棺墓（第10次調査、北條編 1998）などが検出されている。近現代においては、前節でみたように旧日本軍や病院の建造物が立地したことや、この一帯が戦災にあったことが知られており、実際に発掘調査でもこれらに関連する遺構や遺物がみついている。

第5節 本書報告地点と遺構名について

本書では、2011・2012年度に実施した第24～26・28・29次調査の計5地点について報告を行った。各調査地点の調査にいたる経緯・調査体制、調査成果については、次章以降に詳述した。

なお、遺構名について、本書では調査時のものに改変を加えたため、第2表に遺構名対照表を付した。
(三阪一徳)

文献

- 東潮・中原計・石村友規・大谷育恵・松浦稔, 2006. 徳島市八人塚古墳測量調査報告. 徳島大学総合科学部人間社会文化研究 13, 61-83.
- 福家清司, 2002. 中世. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 135-162.
- 藤川智之, 2002. 古代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 115-134.
- 藤川智之, 2015. 徳島県内における律令期帯金具と出土遺跡, 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 11, 71-84.
- 藤川智之 (編), 2002. 観音寺遺跡 I (観音寺遺跡木簡編): 一般国道 192 号徳島南環状道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- ふるさと徳島編集委員会 (編), 1991. ふるさと徳島. 徳島.
- 古田昇, 1996. 徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程. 立命館地理学 8, 61-72.
- 古田昇, 2005. 多様性をもつ中央構造線沿いの徳島平野. 平野の環境歴史学. 古今書院, 東京, pp. 209-246.
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治, 2015. 庄・蔵本遺跡第 27 次調査 (立体駐車場地点) の成果. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要 1, 43-97.
- 早渕隆人, 2002. 古代阿波における官衙と祭祀. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 629-648.
- 平井松午, 1998. 吉野川の河川環境と流域史. 東潮 (編), 川と人間: 吉野川流域史. 溪水社, 広島, pp. 3-25.
- 北條芳隆 (編), 1998. 庄・蔵本遺跡 1: 徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査, 徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第 1 巻. 徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 石尾和仁, 2002a. 近世. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 163-180.
- 石尾和仁, 2002b. 中世阿波における集落の展開. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 647-656.
- 勝浦康守 (編), 1990. 名東遺跡発掘調査概要: 名東町 2 丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査. 名東遺跡発掘調査委員会, 徳島.

第2表 遺構名対照表

遺構名		調査区	遺構面
本書	調査時		
第24次調査（藤井節郎記念医科学センター新営地点）			
土坑1	SK301	北区	第3遺構面
土坑2	SK302	北区	第3遺構面
土坑3	SK303	北区	第3遺構面
不明遺構1	SX301	北区	第3遺構面
溝1	SD01	北区	第1・2遺構面
溝2	SD02	北区	第1・2遺構面
溝3	SD03	北区	第1・2遺構面
溝4	SD201	北区	第1・2遺構面
溝5	SD202	北区	第1・2遺構面
溝6	SD203	北区	第1・2遺構面
ピット1	SP1	北区	第1・2遺構面
第25次調査（附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期地点）			
旧河道	SR01	西区・東区	第3遺構面相当
自然落ち込み	SX01	西区	第3遺構面相当
第26次調査（大塚講堂改修地点）			
溝1	用水路1	第3・6調査区	第3遺構面
溝2	用水路2	第3～6調査区	第3遺構面
溝3	用水路3	第3～5調査区	第3遺構面
溝4	溝2	第3・6調査区	第2遺構面
溝5	溝3	第6調査区	第2遺構面
旧河道1	旧河道2	第3～5調査区	第2遺構面
旧河道2	旧河道1	第2調査区	第2遺構面
井戸1	SX01	第4調査区	第2遺構面
不明遺構1	SX1	第3調査区	第2遺構面
不明遺構2	SX2	第3調査区	第2遺構面
不明遺構3	SX3	第3調査区	第2遺構面
第28次調査（外来診療棟新営地点）			
自然落ち込み	落ち込み	C2区	第3遺構面
土坑・ピット1	SP06	B区	第3遺構面
土坑・ピット2	SP04	B区	第3遺構面
土坑・ピット3	SP05	B区	第3遺構面
土坑・ピット4	SP17	C2区	第3遺構面
土坑・ピット5	SP18	C2区	第3遺構面
土坑・ピット6	SP19	C2区	第3遺構面
土坑・ピット7	SP16	C2区	第3遺構面
土坑・ピット8	SP13	C2区	第3遺構面
土坑・ピット9	SP14	C2区	第3遺構面
土坑・ピット10	SP15	C2区	第3遺構面
土坑・ピット11	SP01	B区	第2遺構面
土坑・ピット12	SP03	B区	第2遺構面
土坑・ピット13	SP02	B区	第2遺構面
土坑・ピット14	SP11	C1区	第2遺構面
土坑・ピット15	SP10	C1区	第2遺構面
土坑・ピット16	SP09	C1区	第2遺構面

遺構名		調査区	遺構面
本書	調査時		
第28次調査（外来診療棟新営地点）			
土坑・ピット17	SP12	C1区	第2遺構面
土坑・ピット18	SP08	C2区	第2遺構面
土坑・ピット19	SP07	C2区	第2遺構面
溝1	SD01	B区	第2遺構面
溝2	SD02	C1・2区	第2遺構面
溝3	SD03	C1区	第2遺構面
第29次調査（学生支援センター改修地点）			
溝27	S27	南区	第3遺構面
溝28	S28	南区	第3遺構面
溝29	S29	南区	第3遺構面
溝30	S30	南区	第3遺構面
溝31	S31	南区	第3遺構面
溝32	S32	西区	第3遺構面
溝1001	S1001	東南区	第3遺構面
溝1002	S1002	東南区	第2遺構面
溝1003	S1003	東南区	第2遺構面
溝04	S04	南区	第2遺構面
溝07	S07	南区	第2遺構面
溝20	S20	南区	第2遺構面
溝21	S21	南区	第2遺構面
溝24	S24	西区	第2遺構面
溝25	S25	西区	第2遺構面
溝26	S26	西区	第2遺構面
自然流路09	S09	南区	第2遺構面
土坑1004	S1004	東南区	第2遺構面
土坑1005	S1005	東南区	第2遺構面
土坑01	S01	南区	第2遺構面
土坑02	S02	南区	第2遺構面
土坑03	S03	南区	第2遺構面
土坑05	S05	南区	第2遺構面
土坑06	S06	南区	第2遺構面
土坑08	S08	南区	第2遺構面
柱穴11	S11	南区	第2遺構面
柱穴12	S12	南区	第2遺構面
柱穴13	S13	南区	第2遺構面
柱穴14	S14	南区	第2遺構面
柱穴16	S16	南区	第2遺構面
柱穴17	S17	南区	第2遺構面
柱穴18	S18	南区	第2遺構面
柱穴19	S19	南区	第2遺構面
柱穴22	S22	南区	第2遺構面
不明遺構10	S10	南区	第2遺構面
不明遺構15	S15	南区	第2遺構面
溝23	S23	西区	第1遺構面

- 勝浦康守（編），1997．三谷遺跡：徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査．徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会，徳島．
- 木原克司，2002．吉野川下流域の条里施行期と阿波国府の構造．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp. 611-627．
- 近藤玲，2003．徳島の弥生時代：縄文時代から弥生時代へ．徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 3，13-40．
- 近藤玲，2012．徳島市眉山周辺の弥生集落の動態．徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 10，31-48．
- 近藤玲（編），2014．南蔵本遺跡：県立中央病院改築事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 84 集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島．
- 栗林誠治，2002．古墳時代．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp. 99-114．
- 中村豊，1998．稲作のはじまり：吉野川下流域を中心に．東潮（編），川と人間：吉野川流域史．溪水社，広島，pp. 79-100．
- 中村豊，2000．庄・蔵本遺跡発掘調査概要：新中央診療棟建設に伴う埋蔵文化財調査．徳島大学施設委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 中村豊，2002．縄文から弥生へ．徳島考古学論集刊行会（編），論集徳島の考古学．徳島考古学論集刊行会，徳島，pp. 245-258．
- 中村豊，2003．徳島における弥生時代終末期の鉄生産．青藍 1，25-36．
- 中村豊，2009a．医療系総合実験研究棟Ⅱ期改修に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1，1-10．
- 中村豊，2009b．西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 1，11-28．
- 中村豊，2010a．庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2，1-9．
- 中村豊，2010b．庄・蔵本遺跡・西病棟新営その他電気設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2，11-21．
- 中村豊，2010c．概要．国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室年報 2，33-42．
- 中村豊（編），2008．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書．徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 中村豊（編），2010．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書，体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺．徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 中村豊（編），2011．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地課外活動共用施設・医療技術短期大学建設に伴う発掘調査報告書，弓道場建設に伴う立会調査報告書．徳島県教育委員会・国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 岡山真知子（編），1999．庄遺跡Ⅲ：大蔵省蔵本団地宿舍新営工事（第 3 期工事）関連埋蔵文化財発掘調査報告，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島．
- 定森秀夫・中村豊（編），2005．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書．徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 島田豊彰，2008．吉野川流域における中世集落の様相．徳島県埋蔵文化財センター研究紀要真朱 7，17-28．

- 菅原康夫, 2002. 弥生時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 63-97.
- 徳島県教育委員会文化財課・徳島県埋蔵文化財センター (編), 2006. 徳島県遺跡地図, 第2分冊. 徳島.
- 徳島県の歴史散歩編集委員会 (編), 2009. 徳島県の歴史散歩, 歴史散歩 36. 山川出版社, 東京.
- 徳島市教育委員会, 1989. 平成元年度文化財調査報告資料. 徳島.
- 氏家敏之, 2002. 先土器時代 (旧石器時代). 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 11-28.
- 山川浩實, 1995. 戦争から豊かな未来へ. 徳島県立博物館, 徳島.
- 山川浩實, 2005. 徳島大空襲, 徳島の自然と歴史ガイド4. 徳島県立博物館, 徳島.
- 湯浅利彦, 2002. 縄文時代. 徳島考古学論集刊行会 (編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島, pp. 29-61.